

投稿

東京ドームがオープンして間もないころ、巨人対ヤクルト戦のチケットが手に入り、観戦。引っぱりなしに回ってくるボールの売り子一人に何かしらひかれるものを感じた。その子は次から次へとボールが売れているのだ。動きはゆったりとしてにややか。帽子のつばにちょっと手を当てて「どうもありがと」と言っている姿が愛らしい。

一方、熱心に売り歩いている子もいるが、それと比較してみると一〇対二、一〇対三ぐらいの差で前者の方が売れている。何回カウントしても結果は同じ。

これを見ると、人には何かを越えた不思議な力が後押ししているのでは

ないか—と思った。その力は先天的に備わっているものなのか、それとも後天的に獲得できるものなのか、この問題は以後長い間、私の重要なテーマになった。

さて、私自身は健康にすっかり自信が持てるようになっていたにもかかわらず、平成十年二月、突然痛風の発作に見舞われた。病院に行き、痛みは消えた。しかし、その後、痛風の薬に異常な副作用が出た。半端ではない。この薬を一生、飲み続ける必要があると医者と言った。薬を飲まないといずれ腎臓を直撃して、人工透析になる。薬の副作用を我慢すべきか、人工透析を覚悟すべきか、切羽詰まった状態。「何とか薬をやめたい方法はないか—」と思った。その

先達の言うことを素直に②

島根 一郎

「八十キの体重を十キ落とせば、あるいは薬をやめられるようになるかもしれない」と医師。よし、それならやろう—と減量を決意。一キ、二キ、三キ、五キとどんどん減量していく。このとき出会った健康食品が痛風も減量も一気に解決してくれる。いつまでもX千紙と鉛筆を持ち歩く、寝るときは寝床にX千と紙と鉛筆を、そして懐中電灯も用意。気付いたらすぐX千し、これを早速実行に移す。たったこれだけで、今までにない知恵が次から次へと浮かんでくる。もしかしたら神仙につながった知恵ではなからうかと思えてならない。特に、朝、目覚めの一瞬に思いつくことは、それだけで実現することを目指

祭業を立ち上げ、成功している丸淳一氏の著書「気づいたら、すぐやる人が成功する」に出会った。何でも気付いたらすぐやる、気付いたらその場でX千する—というのが、これだったら私にもできそうだと早速実行する。いつまでもX千紙と鉛筆を持ち歩く、寝るときは寝床にX千と紙と鉛筆を、そして懐中電灯も用意。気付いたらすぐX千し、これを早速実行に移す。たったこれだけで、今までにない知恵が次から次へと浮かんでくる。もしかしたら神仙につながった知恵ではなからうかと思えてならない。特に、朝、目覚めの一瞬に思いつくことは、それだけで実現することを目指

しは体験、思いが実現を導く力を秘めていることを実感した。

平成三年夏に始めた毎朝五時から二十分が三十分の体操が、たった百日ぐらいで生まれ変わったように丈夫になった。先達の教える素直に聞いて実行した結果である。「気づいたらすぐX千する」こんな簡単なことを始めて二十日もしないうちに結果が出始める。東京ドームで見掛けたあのボール売りの少年の持つ不思議な力、こうした力は、先達の教える素直にそのまま受け入れることにより獲得できたものと思う。心にはそこしただスーパな摩訶(まか)不思議な力が宿されていると思えてならない。

△島根 一郎(しまね・いちろう) 64歳。船橋市北本町在住。

△島根 一郎(しまね・いちろう) 64歳。船橋市北本町在住。

投稿

昭和五十八年、経営していた建売会社は倒産、昭和六十二年正月過ぎに高熱、入院。膠原(こうげん)病と判明、五月の初旬まで入院生活を送った。弱り目にだたり目だった。病院のベッドの上で新聞を読んだ。たまたま「贅の日」だった。土中深くじっとしていた虫たちが春の気配を感じてごめき出す日である。「凍り付いたようなおれの運命もごめき出すかなあ」とささやかな明るい気持ちになった。

退院して近くの本屋で、宇野千代著「幸福が幸福を呼ぶ」が目止まった。その隣には同じ著者の「天風先生座談」が平積みされていた

先達の言うことを素直に①

島根 一郎

のど、ついでにこの本も買う。全く偶然手にしたこの本が、その後の私の人生を大きく変えた。啓蟄(けいち)の日が偶然という形を取って私に引き合わせてくれたように思えてならない。そんなわけで天風会に参加、平成三年の夏、最大の行事である「修練会」に参加。こうして天風会に教えられた「体操」を毎朝実行。三月月曜日、自分の体はこんなに丈夫になったと、自分はもちろん周囲の人もその愛のよりに驚くほひ。「よし、これでおれの運命も改善できる」と思った。

平成五年、勤めしていた不動産会社に、「いくらでもよいから、早く売ってほしい」と中古住宅の販売依頼があった。築三年、3LDK、駅から歩いて十分、悪くない。わが家のわずかな蓄えと公庫融資で買える。いずれ住宅の一軒も欲しいと思っていた矢先だった。こ

相次いで不自然な死に方をした。遺族が「いくらでもいい、急いで」と言う理由はここにあった。しかし、この事情は「家が欲しい」の一心で娘には伏せてあった。それをズバリ見抜かれ、すっかりしよげ返ってしまった私を見て、娘は意外なことをいう。「お父さんが家を売る気になったから、間もなく家が買えるわね」と、「買う気になったけど、買えるわけがないじゃないか」と心の中で叫んだ私だった。

ところが無理に無理を重ねだったが、翌月、マンションを購入することができた。心の不思議さを感じたのだった。(次回に続く)

△島根 一郎(しまね・いちろう) 64歳。船橋市北本町在住。